

「書き講談」が生む作品のヴァリアント

——立川文庫「猿飛佐助」を中心に——

松原久子

一、はじめに

立川^{たがわ}文明堂から出版された立川文庫は、持ち運びやすいサイズであったことや安価に入手できたことなどを理由に、丁稚を中心とする多くの子どもに愛読されていた。なかでも、最も人気であった作品が「猿飛佐助」のシリーズだ。第一編の『^{諸國}漫遊一休禪師』が一〇年で六万七千部売れたのに対し、第四〇編の『^{真田三勇士}猿飛佐助』は二〇万部という最高の売れ行きをみせた。^①立川文庫の看板作品であったために、猿飛佐助を主人公とする作品はこの限りではなく、第九三編『^{忍術}猿飛漫遊記』や第一〇二編『^{名犬}猿飛南海漫遊』という続編が出版された。後には第一四一編『^{忍術活動}猿飛小源吾』といったような、二世ものまで出版されている。^②

「講談から速記講談を経て書き講談へ、さらに小説^③へ」といわれるように、立川文庫作品が成立に至るまでの過程は実に特殊な事情をはらんでいる。^④講談師玉田玉秀齋の講談は、速記者山田都一郎の手を借りることで「速記講談」作品として成功した。玉秀齋の妻である敬の知恵で、敬の娘である寧と都一郎とを縁付かせたことがきっかけだったが、二人の結婚生活は長くは続かず、玉秀齋は二年ほどで速記者を失ってしまう。その後は、敬の長男である阿鉄^{あてつ}の提案で「書き講談」

という方法をとるのだが、「書き講談」作品は思いのほか好感をもつて読者に迎えられた。阿鉄の手による「書き講談」だったものが、次第に玉秀斎を中心とした家族ぐるみの創作となり、「雪花山人」や「野花散人」という名を掲げて、立川文庫として出版されるようになるのである。なお、玉秀斎を中心とする創作集団を、以下「雪花山人」とする。

従来、立川文庫について書かれた文章の多くが、幼い頃の読書体験を懐古的に語ったものや、あるいは語った人々の言葉を集めたに留まるものであり、立川文庫に関する研究は十分なされていないと言いたい。作品成立の特殊性に注目したものはあるが、ほとんどは大衆文学史や児童文学史の中で立川文庫がどのように位置づけられるかを探った概説的な研究にとどまっている。

創作集団のうち、誰がどの作品に携わったのが渾然として掴みづらいという特殊な作品の成立事情をもちながらも、作品そのものの内容や細部に触れるような研究はほとんど行われていない。「速記講談」の影響はどのようなものであったのか。講談の語り口の痕跡は本文にどのように顕在化し、あるいはその装いは、本文にどのような影響を及ぼしているのか。「書き講談」という創作形態がどんな作品を生み、同時にどんなヴァリアントを生んだのかを明らかにした先行研究はない。

本論文は、「書き講談」が作品にどのようなひろがりを与えたのかについて、雪花山人による「猿飛佐助」の変容を追い、その変化を比較・考察することで、大筋は変わらずとも、一定の制約のなかで自由に筆を遊ばせることにより生ずる作品の幅と創作のひろがりが生まれる過程について確認したい。また、当初は講談調の語りを模していたものが、次第に講談の語り口を失っていく様相を明らかにしたい。

二、「猿飛佐助」のヴァリアント

雪花山人による「猿飛佐助」のヴァリアントを調べるにあたり、確認できる文献を列挙する。なお、雪花山人によって著された「猿飛佐助」の変遷過程を確認するため、調査対象は立川文庫に限定しないこととする。

雪花山人「猿飛佐助」のうち、ここでは確認できるテキスト五つを挙げる。

- ① 明治四三（一九一〇）年九月、松本金華堂、二五〇頁、22 cm
・表題…表紙『真田家三勇士猿飛佐助』、中扉なし、本文始「真田家三勇士猿飛佐助」、本文末「真田家三勇士猿飛佐助」
・著述者名…表紙「玉田玉秀齋講演 山田唯夫速記」、本文始「玉田玉秀齋講演 山田唯夫速記」、奥付「講演者 玉田玉秀齋」
- ② 大正三（一九一四）年二月、立川文明堂、一三三二頁、12.5 cm
・表題…表紙『真田三勇士名人猿飛佐助』、中扉「真田三勇士名人猿飛佐助」、本文始「真田三勇士名人猿飛佐助」、本文末「真田三勇士名人猿飛佐助」
・著述者名…表紙なし、本文始「雪花山人 著」、奥付「佛山楼主人」
- ③ 大正五（一九一六）年一二月、立川文明堂、二三三二頁、13 cm
・表題…表紙『真田三勇士忍術名人猿飛佐助』、中扉「真田三勇士忍術名人猿飛佐助」、本文始「真田三勇士忍術名人猿飛佐助」、本文末「真田三勇士忍術名人猿飛佐助」
・著述者名…表紙なし、本文始「雪花山人 著」、奥付「述者 雪花山人」
- ④ 大正六（一九一七）年六月、立川文明堂、四四六頁、19 cm
・表題…表紙『真田三勇士猿飛佐助』、中扉「真田三勇士猿飛佐助」、本文始「真田三勇士猿飛佐助」、本文末「真田三勇士猿飛佐助」

・著述者名…表紙なし、本文始「玉田玉秀齋 講演」、奥付「著作者 玉田玉秀才 講演」

⑤ 大正八（一九一九）年九月、立川文明堂、四九〇頁、15 cm

・表題…表紙『真田郎党 忍術名人猿飛佐助』、中扉『真田郎党 忍術名人猿飛佐助』、本文始『忍術名人猿飛佐助』、本文末『忍術名人猿飛佐助』

・著述者名…表紙なし、本文始「雪花山人 述」、奥付「著者 雪花山人」

ここに挙げたテキストのうち、いわゆる「立川文庫」のシリーズにあたるのは②と③のみだ。②③以外は袖珍本にしてはサイズが大きく、①はそもそも出版元が違う。松本金華堂から出版された「猿飛佐助」は、『女紋』にも描かれたエピソードが元となり、立川文明堂に先んじて出版されたものとも考えられよう。なお、②③は装丁や奥付は異なるものの、本文の内容は全く同じである。テキスト本文の研究については、②③を同一のものとしてまとめて扱う。

袖珍本か否かという以外の形態の大きな違いとしては、各テキストの頁数を挙げることができよう。①～③は二四〇頁前後であるのに対し、④⑤はその倍近くの頁数となっている。後者の作品が前者の作品にはない物語を挿入していたり、内容の一部を膨らませて描いたりしていることがその理由であろう。なお、④のテキストは、「立川長編講談文庫」のシリーズとして出版されている。

立川文庫研究のうち、出版された書誌形態を中心とする先行研究として、畠山兆子の論文をあげることができよう。畠山は立川文庫研究の基礎的な条件が整っていないとして、詳細な資料調査を行うことで、出版や印刷に関わる事情の背景を明らかにしようと試みている。^⑥ 畠山は、文庫の奥付はあてにならないという足立巻一の考えを「確かに、乱丁、印刷の悪さ、誤植が多い」と受けいれつつも、「手がかりは奥付しかない」として、研究の大半を奥付に拠っている。^⑦ しかし、足立が奥付をあてにできないと考えた理由は、山田阿鉄が執筆したであろうところを「山田唯夫速記」として記述し、その役割のみならず、人物名すら変更している点にあった。^⑧ 故意になされた事実と異なる記述は、乱丁や誤植といった問題と

は別次元のものであり、「手がかりは奥付しかない」とするのは早計に過ぎる。立川文庫のテキストの体裁がどのようなものであったのか、あるいは体裁と本文がどのようなにかかわるのかといった研究はまだ不十分といえるだろう。

三、物語の変化

「猿飛佐助」のテキストは、時代が遷ることにより、物語の幅、語りの様相を変化させている。五つのテキストの冒頭は、みな佐助の出生から始まるものの、結末の時代が異なっているのである。

雪花山人による複数のテキストを比較し、その変化を考察した足立巻一の研究⁹⁾を挙げることができる。足立は、先に挙げた①のテキストと②③のテキストとを比較し、二者がどのような関係にあるのかを次のように述べる。

このように『猿飛佐助』『由利鎌之助』『霧隠才蔵』は表題のとおりそれぞれ独立した一編ではなかった。猿飛佐助の物語の展開のなかに鎌之助も才蔵も登場した。

そのことをさらにはっきり示すのは、のちに出た『立川文庫』の第四十編『猿飛佐助』である。この一編は大正期のベストセラーとなり、それによって猿飛は大衆の英雄となったが、これはもともと書きおろされたものではなかった。

実は松本金華堂『猿飛佐助』以下三編をつなぎあわせ、それを骨子に話をふくらませたのである。¹⁰⁾

滑川は、立川文庫の「猿飛佐助」の作品内容は、松本金華堂出版「猿飛佐助」「由利鎌之助」「霧隠才蔵」の三編をつなぎあわせてつくられたものだとしている。

実際に①と②③のテキストとを比較してみると、結末に大幅な時間の違いがあることがわかる。①では、真田勢と秀吉

勢とのあいだに起こった諍いがどうなるのか、というところで物語が中断され、以下のように続く。

直ぐ引続いて申し上げたくはございませうが、例によつて紙数の限りと成りましたにより、本編は一先づ此辺にて止め置きます、偕て中編は「真田家由利鎌之助」と、題して至極面白く御機嫌に伺ひますれば、何卒前編同様御愛読御喝采の程を願ひ上げます^①

松本金華堂の「猿飛佐助」では、「由利鎌之助」が続編として出版される予告はあるものの、②③のように由利鎌之助や霧隠才蔵の登場がない段階で物語が中断されている。②③の立川文庫テキストでは、真田勢と秀吉勢との諍いは解決し、由利や霧隠も登場する。さらには、秀吉の死や家康の台頭という、①には描かれなかつたその後の出来事までもが追加されるのである。

松本金華堂のテキストは①を確認するのみで、続く「由利鎌之助」や「霧隠才蔵」のテキストは確認できなかった。だが、①のテキストで由利と霧隠が勇士に加わる過程が描かれることから、足立が述べるように、松本金華堂の三作を一つの作品につなぎあわせたものが②③のテキストであることは容易に推測できよう。

ちなみに、②③では、家康が真田征伐の命を出したために、紀州へ逃れようという報せをうけ、九度山に向かおうというところで話は終わっている。それに続いて、「四豪傑は若葉を連れて其の場を立ち、道中急に急ぎ、紀州九度山へ差し立ち帰り、久し振りにて主従の対面」というように、「再現された語り」ではなく、「物語化された言説」によって語られている。^②のちの展開は予告的に説明されてはいるものの、話として描かれているのは報せをうけたところまでと捉えることができよう。

それでは、立川文庫以降の「猿飛佐助」は、どのような物語として展開されたのか。

④のテキストでは、途中までは②③とほとんど変わらない。ただし②③に加えて、その後の歴史が描かれ、真田勢の再度の活躍に始まり、大坂夏の陣を予告するところまでが描かれる。しかし物語の中心人物は佐助に限定されるわけではないため、表題に「猿飛佐助」の文字を掲げることには違和感を覚える。ここから、④のテキストは、②③のテキストと他の真田家を描いたテキストとをつなぎあわせたものであると推測することができる。金華堂版をつなぎあわせて立川文庫のテキストとしたのと同様に、立川文庫のテキストと他のテキストとをまとめて新たに出版したのである¹³⁾。

その後に出版された⑤のテキストは、④よりも頁数は多いものの、結末は②③とほとんど変わらない時代でとぎれている。その原因として考えられるのは、⑤では、従来のテキストにはなかった話や再現されなかったエピソードが、丁寧に描写され、差し挟まれていることにある。

例えば、真田幸村が鳥居峠へ猪狩しぐらに来た場面を挙げておこう。①～④のテキストでは、この場面は幸村と佐助との出会いのためにのみ用意されており、狩りの様子はほとんど描かれない。それに対して⑤では、狩倉の様子から手柄の帳面付け、獲物を料理するまでが詳細に描かれている¹⁴⁾。⑤のテキストのように、別の話とつなぎあわせるのではなく、語られていない物語を膨らませて描写することで、②③と同じ筋であるところを倍にも膨らませているのである。

「猿飛佐助」は、現在の人物である真田幸村の部下として登場するため、作品の背景となる時代が大きく改変されることはない。しかし、歴史的イベントという大きな枠組を前提としつつも、その中で佐助を自由に活躍させることによって、それぞれのテキストの物語が幅広く展開している。講談、そして「書き講談」から発展した創作であったためか、再現と物語化とをうまく利用し、話の一部を省いたり引き延ばしたりを自由に行うことで、物語のヴァリエーションが生まれている。

四、語りの変化

①～⑤のテキストがもつ物語の違いを比較し、物語のヴァリエーションが生まれる原因として、講談調の語り口の影響があることがわかった。次に、五つのテキストにおける語り口のような特徴があるのか、どのような変化があるのかを確認したい。

滑川道夫は、立川文庫の語りの特徴を評して、「民俗芸能である講談口演を出発として、書き講談に転回して、創作講談への移行を示している」ために、「その文章表現の様式には、講談的パターンが定着している」と述べる¹⁵。また、「文庫の表現的特色は、話芸講談の語り口を主要なもの」だと主張し、その特徴を三つ挙げている。次に一部を抜き出す¹⁶。

1 単文の積み重ねではなく、豊かけて、どこまでも続いていく勢をもった文章構成になっている。これは口演の語り口を投影しているからである。普通の文章では当然句点で終るべきところが、接続助詞で接続していく。重文がさらに重文をよびこんで連続する形が多い。そのなかに会話が織りこまれて進行する。

2 総合的な叙述のなかに、ある日ある時の特定な事件を織りこんで展開させる。これも講談の手法である。

3 章の初めに、格言金言がきまった発想として書かれる。(中略)この出だしのことばに倫理性をもたせるのが講談調のパターンであるがそこに庶民的な教化性を具現しようとしている。これも書きだしの文章の特色としてあげられるだろう。

滑川が挙げる特徴のうち、1は講談師が切れ目なく語る様子の反映を指摘したのもでもあろう。本文には句点や改行が

ないために、よりその語り口が強調されているととれる。特徴の2は、物語化して語っている場面と再現して語っている場面との交響性に関する指摘であることがわかる。また、3の格言金言に関する指摘立川文庫版の「猿飛佐助」に顕著な特徴である。

立川文庫における講談調の語りにおける特徴は、滑川の指摘のみで終わらせることはできない。それについては、金華堂と立川文庫とを比較するなかで、「文体の違い」として足立が言及している。¹⁷

金華堂本が読む講談の文体とすれば、文庫本は書く講談のそれである。たとえば、金華堂では、「玉田家十八番独特の口調を以つて、勇壮活潑に伺ひ上げますれば」とか、「……サア此の落着は何うなりませうや実に面白き一条は、次回に伺ひ続けまする……」とか、そういう口上が頻出するが、文庫には一切ない。

また、金華堂が第一回、第二回というように席での連続講談式に区切ってゆくのに対し、文庫本は小見出しをつけて話をつづけてゆく。その小見出しが「イデヤ組打御参なれ」「後に目はないか不自由な奴だ」「予の腕前を見よヤツ」「天から降つたか地から湧いたか」というように、読者の興味を惹くように工夫がこらされている。

足立は格言金言の指摘に加えて、講談の口上と講談の席を区切るという文体上の特徴について指摘している。滑川と足立の挙げた講談調の語りの特徴を参考に、①～⑤のテキストを確認することとしよう。

まず、講談風の口上だが、これがはっきりあらわれているのは①の金華堂のテキストのみである。滑川が挙げた例のほかには、各章の末文に必ずある「次回に詳しく口演くべんじまする」や、「ソハ次回のお物語」といった文句が挙げられよう。この文言を入れることで、席を分けたような装いとなり、講談らしさが演出されることになる。②～④のテキストでは、席を分ける文句はほとんど失われている。

「立川長編講談文庫」として出版された④の冒頭は「エ、今回お好みによりまして、猿飛佐助の伝を申しあげることいたします」という口上で始まっている。しかし、末文の文言は全く存在しないために講談らしい口上は冒頭のみに残っており、作品全体への影響は大きいとはいえない。また、②③にみえる「今回説き出す忍術の名人猿飛佐助は……」という部分は、おそらく口上の名残であろうとも考えられる。

次に、第一回、第二回……という区分けは①のみである。②③は回数が消え、各話のタイトルのみ記され、④⑤は数字と各話タイトルが記されているものの、回という意識は欠落している。

また、たたみかけるような語りは①③に顕著な特徴である。④⑤になると、句点がしばしば登場するようになり、改行も行われるようになる。

五つのテキストを見比べると、講談らしさを最も強く装っているのは、口上や文言の特徴、回に分ける意識の有無などから①のテキストだといえる。次いで、格言金言を章の頭に据えた②③が続くが、④⑤は講談の語り口はほとんどなく、かすかにの痕跡が残るのみといえよう。

金華堂のテキストと立川文庫のテキストとを比較した足立巻一は、「立川文庫のほうを読み物の言葉として、はるかに洗練されている」と述べ、「講談が聞くものから読むものへ、語るものから書くものへと完全に転換したことを示し、同時に『立川文庫』がのちに大衆小説へとつながる新講談の先駆であった」と主張する¹⁸。しかし、立川文庫を無責任に持ち上げる足立の評価は適切なものとはいえない。

速記本は、当初から読むものとしての性格を強く持っていた。落語速記本である円朝の『怪牡丹燈籠』でも、読みの音をルビとして、その意味がわかるように漢字が振られるという、いわゆる「振り漢字」の形態をとることで、読むための性格を色濃くしていた。明治三六年に出版された玉田玉秀齋講談・山田酔神速記の『真田諸国漫遊記』でも、振り漢字が登場する。冒頭の語りでは「玉秀齋」というように、「わたくし」という音に「玉秀齋」という意味の漢字を振っており、読む

ための講談としての体裁をなしていた。それに対して①～⑤には振り漢字は登場せず、読むための講談になったというよりも、そもそも講談という装いを解いたという印象が強い。

①～⑤の語りの推移をみると、講談調の装いは次第に失われていくものの、話の一部を省略したり事細かに描写したりして内容を自由に膨らませる様子は、日時や場所、客層などを見て語りの程度を自由に判断した語り芸の性格そのものである。立川文庫は、講談の装いが失われ、語り芸の性格のみを受け継いでゆく中継地点に位置する作品群だといえる。

五、おわりに

玉田玉秀齋を中心とする創作集団である雪花山人による「猿飛佐助」テキストの推移を追った。実在の人物や歴史的背景の一部を押さえながら展開するために、物語の筋が大きく変化することはなかったが、話をつなげたり膨らませたりと、テキストごとに様々な創作のひろがりがあることがわかった。また、時代を経るにしたがい、講談調の装いが失われていったこともわかった。講談雑誌にも変化があるなど、講談にとつての過渡期的時期であったことが原因ではないかと考えているが、調査が不十分なため今後の課題としたい。加えて、立川文庫を始めとする、雪花山人の「猿飛佐助」に関するテキストのうち、確認できていないものもいくつかある。確認できていないテキストとの比較・考察も今後の課題としたい。

註

- (1) 鶴見俊輔「立川文庫への道 足立巻一」『立川文庫の英雄たち』(『潮』第三五一号、一九八八・七) 三六七頁
- (2) 滑川道夫「大衆的児童文学前史としての『立川文庫』」(加太こうじ・上笙一郎編『児童文学への招待』南北社、一九六五・七)

一二七～一二八頁

(3) 「大衆の広場へ」(稲垣達郎ほか編著『日本文学の歴史 11人間賛歌』角川書店、一九六八・三) 四〇七頁

(4) 立川文庫成立については、池田蘭子の自伝的小説『女紋』(河出書房、一九六七・九)や、足立卷一「山田敬と山田都一郎」(『立川文庫の英雄たち』文和書房、一九八〇・八)などに詳しい。

(5) 前掲(4)の『女紋』には、玉秀齋が「猿飛佐助」を立川文明堂に持ち込もうとする前に、松本金華堂の主人が強引に原稿を見せてもらうという場面がある。松本金華堂は、原稿の表題を店の貸本用講談本の奥付に、次の発刊予告として掲載したという(二〇八頁)。そのような経緯もあって、立川文明堂に先立って松本金華堂から「猿飛佐助」が出版されたとも考えられよう。

(6) 畠山兆子「立川文庫」基礎研究(『梅花児童文学』第一二号、梅花女子大学大学院児童文学会、二〇〇四・六) 一～一七頁、畠山兆子「立川文庫の研究―奥付を中心に―」(『梅花女子大学文化表現学部紀要』第一卷、二〇〇四・一二) 五三～五六頁

(7) 前掲(6)、畠山(二〇〇四・一二) 六五頁

(8) テクスト①のこと。また、『女紋』にも、『侠客、野狐三次』の書き講談を阿鉄が行ったにも関わらず、敬の望みに従って「山田唯夫速記」としたというエピソードが登場する(一四七頁)。著作に携わった人物名は、しばしば故意に書き換えられたとも考えられよう。

(9) 足立卷一「猿飛佐助の成立―中川玉成堂と松本錦華堂本と中心に―」(『立川文庫の英雄たち』文和書房、一九八〇・八) 一七一～一八九頁

(10) 前掲(9)、一八七頁

(11) テクスト①、二〇三頁

(12) ジュネットのいうところでの「再現された言説」と「物語化された言説」のことを指す(ジェラルド・ジュネット著、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール―方法論の試み』水声社、一九八五・八)。

(13) 立川文庫②③のテクストにつきあわされた真田家を描いたテクストは、まだ確認できていない。テクストの特定は今後の課題としたい。

(14) テクスト⑤、三七～四〇頁

- (15) 前掲(2)、一七〇～一四〇頁
- (16) 前掲(2)、一三八～一三九頁
- (17) 前掲(9)、一八七～一八八頁
- (18) 前掲(9)、一八八頁

〔付記〕

本論引用では、旧漢字は適宜新漢字に改め、仮名遣いは本文のままとしている。

なお、①⑤のテキストのうち、①④⑤の資料は、近代デジタルライブラリーの各テキストに拠った。また、②は『名著復刻 日本児童文学館第一集』（ほるぷ出版、一九八〇・三）、③は『復刻 立川文庫傑作選 猿飛佐助』（講談社、一九七四・九）のテキストに拠った。

（博士後期課程）